まちむら発見①

プロジェクト 本と温泉

兵庫県豊岡市城崎町　NPO 本と温泉

「歴史と文学といで湯の街」という城崎温泉にかかる枕詞を作り出した先人たちの努力を次代に伝えてゆくために、今を生きる僕たちができることは何か。城崎温泉を訪れた多くの文人・墨客の中でも特に「城の崎にて」を残していただいた志賀直哉先生の影響は大きく、志賀先生の城崎来訪100周年に当たる2013年にもう一度文学の街として感じてもらえる取り組みをしようとはじまったプロジェクト【本と温泉】。

今では城崎温泉は松葉ガニや但馬牛などの食材、「浴衣の似合う町」として若者や外国人にも人気を博していますが、その歴史をたどれば与謝野晶子や島崎藤村など多くの文人墨客に愛されたことが今の城崎温泉の下地となっています。しかし、現在温泉街には文学碑などはあっても文学の香りを現在進行の形で感じるものがなく、温泉街の若手も「城の崎にて」すら読んだことがないのが実情でした。

そこで温泉街にある旅館の若手が集まり、これからも城崎温泉が愛される理由の一つとして文学を残してゆこう、現在進行で感じられる街づくりをしようと立ち上げたのが「NPO本と温泉」。活動するにあたりブックディレクターとして活躍されている幅充孝さんにアドバイスをいただき、地域に貢献でき作家とともに作り上げていける作り手になるための方向性を次のように決めました。

①制作した本は城崎地域限定で販売する。
②制作を依頼する作家には城崎に滞在してもらい執筆してもらう。
③作品を将来にわたり提供できるように、出版・販売できる仕組みを立ち上げる。

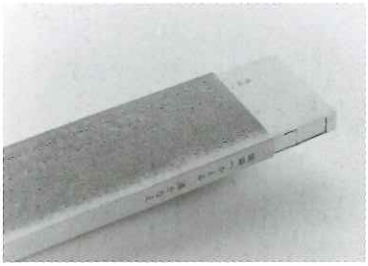
2013年の第一弾は、志賀直哉の「城の崎にて」に注釈本をつけて2冊セットの豆本。僕たちの活動の原点である「城の崎にて」は執筆より100年近く経過しており、時代背景や城崎へ来た経緯などがわかりにくいことが手を出しにくくしていると考え、注釈をつけることで内容にすっと入っていける環境を作ることを目的としました。また、10センチ四方の豆本とすることで浴衣の袖に入れ、本を持ちながら温泉街を散策し志賀直哉のたどった足跡をたどれるという趣向も含めました。

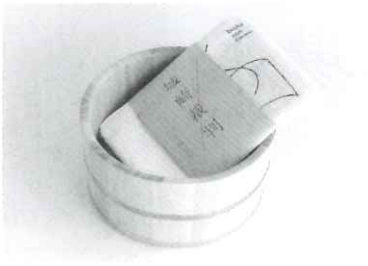
翌年には、「プリンセストヨトミ」や「鴨川ホルモー」で有名な万城目学さんによる「城崎裁判」を出版することができました。万城目学さんは関西出身の作家で関西を舞台にした作品を多く書かれている中でまだ兵庫県を舞台にした作品がないこと。また、後世に残したい本として志賀直哉の「清兵衛と

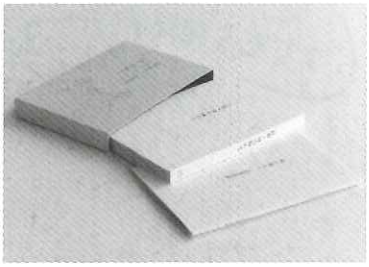
瓢箪」を薦められていたことがあり執筆を依頼しました。ベストセラー作家に数千部しか販売できない本の執筆依頼は難しいかと思われましたが、地域限定でしか販売しないことや本で地域を盛り上げる試みを評価して頂き快諾頂けました。

前回に引き続き、城崎でしか販売しないということを生かし、装丁はタオル生地のカバーに水に濡れても破れにくいストーンペーパーで制作することで、お風呂の中でも読める本にしました。内容はかつて投石で死んだ先祖の無念を晴らそうとイモリの化け物が襲ってくるという万城目ワールド。

立ち上げ当初、本の販売を温泉街の商店に依頼したが多くは売れ行きに半信半疑であり、扱ってくれる店は数店舗しかありませんでした。しかし、第二弾の「城崎裁判」がこの状況を変えてくれました。販売開始2週間で500部以上が売れる勢い。本を目当てに温泉街に来たファンから温泉街の商店に売れ残っていないかの問い合わせが殺到する状況になったのです。お土産屋さんや喫茶店だけでなく、普段、観光客と関わることの少ない写真屋さんや本屋さんなども取り扱いを始めてくれました。今まで間接的に城崎温泉の観光客とつながっていた町民と新しくできたこのつながりは、我々旅館が主導する誘客への理解を深めるとともに販売を通じてお客様と関わることでもてなす母数を増やしたこと。また、街の中で本の売れ行きや次作に対する興味など普段つながりのない方とのコミュニケーションも増え、







活動への自信を深めるきっかけとなりました。

第三弾では、「告白」や「ユートピア」などで有名な湊かなえさんに依頼することができました。第二弾を執筆した万城目学さんから、湊かなえさんが頻繁に城崎温泉を訪れているとの情報を頂き、間を取り持っていただいたことで実現につながりました。大のカニ好きという湊かなえさんが書き下ろしてくださった「城崎へかえる」は、装丁は本の内容を生かし、松葉ガニの足をイメージしたざらざらとしたテクスチャーとゆでガニの身をすっと抜くような製本にこだわり、こちらもインパクトのある本として販売を開始。相乗効果でいずれの本も1万部を超える売れ行きとなっています。活動開始から5年、城崎で作り城崎でしか買えないという「地産地読」にこだわったことで、城崎温泉に新しい客層を呼び込めたこと、人気が出たことで多くの地域住民を巻き込むことができ、観光に携わらない住民ともコミュニケーションを増やせたことなど城崎温泉をPRする素材としてなくてはならない存在となりました。温泉街にある文芸館では、過去の文人墨客の紹介と合わせて、特別展として万城目学展・湊かなえ展を順次開催。オープニングイベントなどにはお二方とも参加して頂き対談していただくなど、文学が息づく街へと変わってきたのかなと感じています。引き続き第四弾・第五弾の執筆依頼や文学の息づく街づくりを目指して活動継続中。

（NPO本と温泉　代表　大将伸介）